OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	前置詞 with の意味拡張 : COMITATIVE 以前を中心に
Author(s)	米倉, 陽子
Citation	Osaka Literary Review. 1998, 37, p. 13-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25366
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

前置詞 with の意味拡張：
COMITATIVE 以前を中心に

米 倉 陽 子

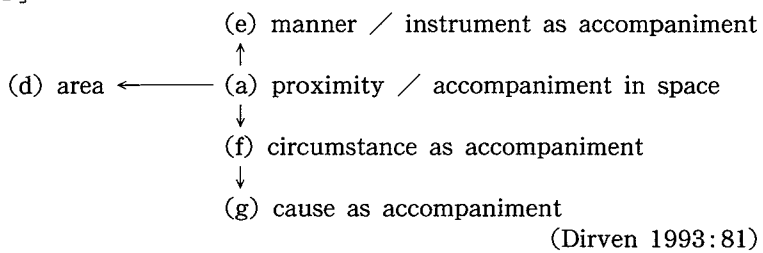
1. with の解釈に関わる問題点

前置詞 with は現代英語では、提携 (association) や随伴 (accompaniment) の意味を概念化することが多い。これらは物理的に距離が近い関係を表わしていると考えられる。Dirven (1993:80-81) によれば、(1) に示した with の用法は図1のような放射状ネットワークを形成しており、より抽象的な with の意味は全て随伴概念のメタファー化であると言う。

(1) a. proximity in space: John is sitting *with* Mary
b. −
c. −
d. area: deal *with* a problem
e. manner, instrument: *with* great precision, *with* a key
f. circumstance: (I cannot do it) *with* everybody laughing
g. cause: tremble *with* fear

(Dirven 1993:80)

[図1]



(Dirven 1993:81)

しかし with には随伴概念では説明が困難な用法がある。例えば (2) の

with はむしろ 'against' の意味である（「日米が第二次世界大戦中に組んで戦った」と言う意味ではない）。

(2) Japan fought *with* the US in World War II.

また break with のように、随伴と言うよりはむしろ別離（separation）の概念を表わしているように見える用法もある。

そこで *OED*（s. v. *with* prep. A.）を調べると、初期の段階で優勢だった意味は対立概念（'against'）や 'towards'、'alongside' であること、中英語（ME）期に mid の意味を引継いだこと、またラテン語や古期北欧語（ON）もその意味発達に影響を及ぼした可能性があることが示されていた。さらに現代英語の 'with the stream' の意味は古英語（OE）では mid streame であらわされ、一方 OE において wið streame は 'against the stream' を表わしていたと言う（*OED* s. v. mid prep.[1]）。*OED* の記述は、OE 期の with のプロトタイプ的意味が 'against' であったことを表わしている。本来は対立（opposition）の概念を表わしていた with が随伴概念という一見、反対の関係にあるように見える意味を表わすようになったことは興味深い。また *OED* から明らかなように、with は ME 期に mid から意味を引き継いだが、認知的要因が意味発達に全く関係しえないわけではない。その例として、動詞 take と ON 語彙 taka, OE 動詞 niman の相互作用を取り上げる。take は ON 起源の動詞であり、(3) にも見られるように ON の影響を強く受けている。また take on 'to touch' は ON の taka á に（*OED* s. v. *take* v. B. I 1.）、take with 'to receive' は ON の taka við に相当している（*OED* s. v. *take* v. B. XI 75. a.）。さらに OE には現在の take とほぼ同じ意味を表していた動詞 niman が存在しており、主に競合という観点からその意味的発達についての考察が行われてきた。

(3) "The construction *t* (*aken*) to + inf. was evidently modelled on

OScn *taka at* + inf., which had the same sense...."
(Rynell 1948:54)

Rynell (1948:47－56) は *Anglo-Saxon Chronicle* に見られる niman と taken の頻度を比較しており、それによると taken は 'to seize' などの原義に近い意味で使用されている例が大半である。しかし Chronicle E (1132－54) には OE 句 fon to rice にかわって tacan to þe rice が、niman to wife にかわって tacan to wiue が登場しており、競合においてもまず語レベルの基本的意味から定着していることが分かる。これは意味変化に競合以外の他の要因が働いた可能性があること示唆する。

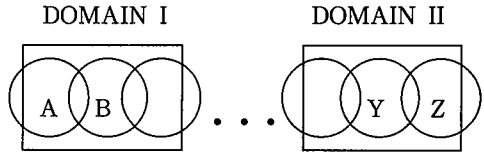
2．共時的意味拡張と通時的意味拡張の関係

共時的に考案される意味拡張と実際の通時的意味拡張は必ずしも一致しない。その理由の一つにプロトタイプとして捉えられるものが変更される可能性が挙げられる。Heine, Claudi, and Hünnemeyer (1991:101) は、ある会話の含意が因習化されると文脈導入による再解釈 (context-induced reinterpretation) が起こると考えている。この時、本来焦点的でない意味が焦点的になる前景化が起こる (Norvig and Lakoff (1987) では 'profile shift' と呼ばれる)。Heine et al. はエウェ語の名詞 ví 'child' から接辞 -ví への文法化をとり上げている (Heine et al. 1991:86-97)。この名詞は YOUNG と DESCENDANT-OF という概念構造から成り、様々な概念的拡張チャンネルが見られる。例えば megbé-ví は 'the last-born' (DESCENDANT が前景化) あるいは 'narrow back' (SMALL が前景化) の意である。因習化された含意がさらに別の概念への拡張に利用されることもある。例えば ßu' kulá-ví は 'somebody who knows how to drive but has not yet acquired a driving license' (YOUNG に代わって NOT YET PASSED AN EXAM が前景化) の意味である。このように連鎖的に意味が拡張され、焦点化される意味がシフトして行くと仮定すれば、プロト

タイプとして捉えられる概念が変更される可能性も考えられ、共時的にプロトタイプとして認識される意味は歴史的にもっとも古い意味であるとする必要は必ずしもない。

また二つの意味間の距離が遠ければ遠いほど、これらは異なる認知領域に所属する傾向がある。 説明のために Heine, Claudi, and Hünnemeyer (1991) から図2を引用する。

[図2]



(Heine, Claudi, and Hünnemeyer 1991:229)

図2は A から Z までのそれぞれの意味が他の意味と共通の特性をある程度は持っているが、A と Z という二つの端点に位置する意味間には共通特性がないことを表わしている。歴史的に早い意味が様々な要因で喪失されると、意味間のつながりが感じられなくなる場合がある。たとえば上記の図で意味 B から Y までが完全に、あるいはほとんど使用されなくなった場合、意味 A と意味 Z 間に共時的概念リンクを打ち立てるのは困難になる。具体例を flower と flour の関係からとろう (Görlach 1982:121)。ME では flour は「花、もっとも最良のもの」という意味であった。*OED* (s. v. *flower* n.) を見る限り、flower という綴りが定着しはじめるのは 16 世紀後半のようである。 綴りは 16 世紀から 18 世紀の文法家にとっては非常に重要であったので、彼らは正書法の確立にあたって同音異義語を出来るだけ文字で区別した。このことは、16 世紀後半時点ですでに flour の二つの意味（「花」と「小麦や穀物の最良部分」）は同音異義語として認識されていたことを示唆する。そして「最良のもの」という flour の古い意味がほとんど認識されな

くなった結果、この二つの語は現在ではまったく別の語彙として扱われているのである。

しかし共時的意味拡張と通時的意味拡張の接点も多い。その一例として、意味変化とメタファーやメトニミーなどの認知的要因との関わりがあげられる。もっとも顕著な進歩は文法化研究であり、Heine, Claudi, and Hünnemeyer (1991:259) によれば文法化は言語構造に写像された認知活動として捉えられる。また Ziegeler (1997:237) は、通時的発達経路と個人発生的発達経路（つまり言語習得経路）との間にはっきりと平行性が見られるケースがあることを指摘している。従って通事的発達過程を観察することは人間のもつ認知能力を解明するために役に立ちうるし、意味法化に関わる問題を考える際には共時的調査と通時的調査の区分が不適切である場合もあると言える。

3．文法化理論からの先行研究

Heine, Claudi, and Hünnemeyer (1991:156-158) には i から vii のような格機能の文法化基準があげられている。

i　語源的基準（語源的に古い意味ほど文法化を受けていない)。

ii　SPACEの概念を含むものほど、文法化が進んでいない。

iii　人間の参与者を含む概念ほど、文法化が進んでいない。例えば (4a) の for よりも (4b) の for の方が文法化が進んでいると言える。

(4) a. I bought a dressing table *for* Mary.
b. I bought a dressing table *for* the bedroom.

iv　次元性基準（3次元の物理的概念ほど、文法化が進んでいない)。

v　時間的関係を表わす範疇は、論理的範疇よりも文法化が進んでいない。

vi　包括的概念ほど、文法化が進んでいる。例えば PERSON 概念よりも OBJECT 概念の方が文法化を受けている。

vii ある形態素が名詞句も節も統率するのであれば、後者の使い方の方が文法化が進んでいるといえる。

以上のように考えると、格機能は次のように並べられる。

(5) ABLATIVE ＞ AGENT ＞ PURPOSE ＞ TIME ＞ CONDITION ＞ MANNER
ALLATIVE　COMITATIVE　INSTRUMENT　CAUSE
LOCATIVE　BENEFACTIVE　DATIVE
PATH　POSSESSIVE
(Heine, Claudi, and Hünnemeyer 1991：159)

(5) から、現代英語に見られるwithと関係する COMITATIVE 以降の機能発達の大まかな経路を (6) のように予想することは可能である。

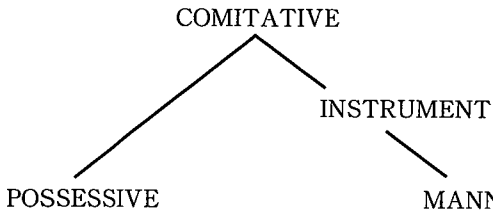
(6) COMITATIVE ＞ INSTRUMENT, POSSESSIVE ＞ CAUSE ＞ MANNER

Heine, Claudi, and Hünnemeyer (1991：164-166) は現代英語の with の用法から以下のような考察を行っている。

(7) a. She went shopping *with* her husband.
b. The blind man crossed the street *with* his dog.
c. He did it *with* a crowbar.
d. ? He did it *with* intelligence.
e. He did it *with* enthusiasm.
f. A man *with* a red nose
(Heine, Claudi, and Hünnemeyer 1991：164-166)

(7a) では with は COMITATIVE の意味であり、(7c) では INSTRUMENT、(7e) では MANNER を表わしている。(7b) と (7d) はそれぞれの中間的例である。(7f) のような例では POSSESSIVE 概念が感じられるが、Heine et al. (1991) はこの用法と with の他の用法とは大きく異なるとし、図 3 のような with の概念的ネットワークを提案した。

[図3]



(Heine, Claudi, and Hünnemeyer 1991:166)

しかし1節で見たようにwithのCOMITATIVE機能は比較的、後の段階で獲得されたものである。それ以前にwithがどのような発達経路を辿っていたのかは、Heine et al. (1991) では全く言及が無い。

4. COMITATIVE 以前の with の用法

4.1. OE 期における with のベース概念

本稿では (8) に見られるような前置詞 with の表わす対立概念を図4として表わす。[1] 図4では前置詞の tr と lm は互いに反発しあう関係（心理的なものも含む）にあることが二つの矢印により表わされている。[2]

(8) a. be norðan is se sæ, þe ægþer is ge nearo ge hreoh, *wiþ* Italia þam lande. (Ælfred *Orosius.* p. 21:10-11) [3]
(=to the north there is the sea, which is both narrow and rough, against the country of Italy)

b. . . . . , þætte Grendel wan
hwile *wiþ* Hroþgar, (*Beowulf* 151-152) [4]
(=that Grendel fought for a long time with Hrothgar)

[図4]

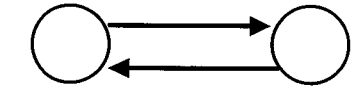


図4をベースとして、少なくとも次のようなプロファイルシフトによる解釈上のオプションが考えられる。

i　tr から lm への矢印も、lm から tr への矢印も、等しくプロファイルされる。
ii　tr から lm への矢印のみプロファイルを受ける。
iii　lm から tr への矢印のみプロファイルを受ける。

また二つの矢印の発生順序について次の点で解釈が分かれる。

i　二つの矢印の発生順序については含意が無い、もしくは同時に発生。
ii　tr から lm への矢印のほうが先に発生。
iii　lm から tr への矢印のほうが先に発生。

これらの解釈のうちどれが選択されるかは、動詞や文脈によっても大きく影響を受ける。ただし二つの矢印のプロファイルされる部位による選択肢数と発生順序による選択肢数とを掛け合わせると全部で9通りのパターンの解釈が得られるはずであるが、これらはあくまで理論的には可能であるという事であり、その全てが実際に言語に現れると断言するものではない。

4．2．with の意味拡張

対立するものはしばしば分離する。従って対立概念から（9）のような別離概念への拡張は容易である。この時、二つの矢印の発生順序については中立的である。

(9) . . . . . , wyrd ungemete neah,
se ðone gomelan gretan sceolde,
secean sawle hord, sundur gedælan
lif *wiþ* lice;　　(*Beowulf* 2420-2423)
(=the fate is immeasurably close, and it is coming upon the old man to seek out the treasure of the soul, and separate a life from a body)

対立概念から（10）のような対比性を表わす表現へも拡張されやすい。

(10) forðon þe mid godum mannum nis naðer ne gold ne seolfor *wið* godes mannes freondscipe wiðmeten.
(*Apollonius of Tyre* p. 12: 22-23)
(=because among good men, neither gold nor silver is not compared with good men's friendship)

図4で lm から tr へ向かう矢印のプロファイルが弱化すると、(11a) に見られるように 'towards' の解釈が発生する。(11a) では、lm から tr へ向かう矢印の存在が完全に否定されているわけではないのは明らかである。なぜなら波は海岸からの反発力を受けるからである。この時、矢印の先端部が実際に lm に到達する必要はなく、単に lm の近辺に向かうものであればよい。また lm から tr へ向かう矢印のプロファイルが先に発生すると考えると、(11b) のように 'in return for' の意味になる。

(11) a. . . . . streamas wundon,
sund *wið* sande; (*Beowulf* 212-213)
(=streams, the sea-water eddied the sand)
b. Ac hit Scipia nolde him aliefan *wið* nanum oþrum þinge butan hie him ealle hiera wæpeno ageafen. . . .
(Ælfred *Orosius* p. 111:30-p. 112:1)[5]
(= but Scipio would not allow them it in return for any other thing except they gave him all their weapons)

(11b) のような例は INSTRUMENT 機能の前駆的存在であるとも考えられる。with の lm によって、その tr が得られることが可能となるからである。

図4の二つの矢印の表わす対立性が弱化し、tr が lm の方向へ向かうと同時に lm からも tr が返されるという含意が強まると、(12) のような例が可能になる。この時、互恵性概念が発生する。(12a) は意志疎通 (communication) の場への転用であり、(12b) は交渉の場への転用である。このような例では文脈が with の解釈に重要な役割を果たす。節レベルの主語は前置

詞の tr を介して、前置詞の lm と関係を持つ。

(12) a. . . . . Hy benan synt,
þæt hie, þeoden min, *wið* þe moton
wordum wrixlan; (*Beowulf* 364-366)
(=they request that they may be permitted to exchange words with you, my prince)
b. . . . . , þætte Grendel wan
hwile wið Hroþgar, heteniðas wæg,
fyrene ond fæhðe fela missera,
singale sæce; sibbe ne wolde
wið manna hwone mægenes Deniga, (*Beowulf* 151-155)
(=that Grendel fought for a long time with Hrothgar, carried on enmities, crime and violence for many years, continual strife: he would not make peace with any man of the host of the Danes)

図4において tr から lm への矢印は、lm から tr へ向かう矢印に反応して現れる抗力であるという含意が強化されると（つまり矢印の発生順序は iii)、(13) のように防御 (defense) 概念が発生する。ただしこの用法は with が単独で生み出した機能ではなく、共起する動詞（(13) では werian 'protect') の影響をつよく受けている。

(13) . . . . . ; wit unc wið hronfixas
werian þohton. (*Beowulf* 540-541)
(=we two intended to protect ourselves against whales)

tr が lm 方向へ移動していくと、結果として lm の近くに位置することになる。そこで 'towards' がプロファイルシフト（プロファイルされるのは結果状態のみ）を受けた結果、(14) のような 'alongside' の意味を獲得したと考えられる。しかし (14a) では、壁の反発力が働いていることが予想されるので、まだ対立概念がかなり残っていると言える。

(14) a. Setton sæmeþe side scyldas,
rondas regnhearde *wiþ* þæs recedes weal;
(*Beowulf* 325-326)
(=(they) set broad shields weary from the sea, wondrously strong shield-bosses against the wall of the building)
b. þa he þæt seow, sum feoll *wiþ* þone weg,
(The *Gospel of Saint Luke* viii. 5)
(=and as he sowed, some seed fell along the footpath)

さらにスキーマ化が進むと with は単にその tr が lm の近隣にあることのみを表わすようになり、随伴概念が確立した。スキーマ化が進んだ状態を図示すると図5のようになる。なお、図5中の SD (search domain) は lm の近隣範囲に相当する。[6] 図5のようにスキーマ化されたことにより様々な機能への拡張が可能になった。例えば (15) では with により共有 (sharing) 概念が表わされている。

[図5]

(15) þæt hie him oðer flet eal gerymdon,
healle ond heahsetl, þæt hie healfre geweald
wiþ Eotena bearn agan moston, (*Beowulf* 1086-1088)
(=that they should make entirely free for them another hall, a chamber and high-seat, so that they might have possession of half of it, sharing it with the sons of the Jutes)

4．3．mid と with の関係

前置詞 mid は OE において with よりもはるかに使用頻度が高い。*Apollonius of Tyre* から (16) にその例を挙げる。

(16) a. COMITATIVE
Ða wearð Apollonius swiðe gedrefed and *mid* his geferum on scip astah and reow oð þæt he becom to Tirum.
(*Apollonius of Tyre* p. 6 : 31-p. 8 : 2)
(=then Apollonius became disturbed and ascended on the ship with his companions and rowed until that he reached Tyre)

b. INSTRUMENT
On þisum þingum soðlice þurhwunode se arleasesta cyngc Antiochus and *mid* gehywedan mode hine sylfne ætywde his ceastergewarum swilce he arfæst fæder wære his dohtor,
(*Apollonius of Tyre* p. 4 : 12-14)
(=the most impious king Antiochus continued on this affair, and with a feigned mind showed himself to his townsfolk as if he were her merciful father)

c. MANNER
Ða cwæð se cyningc *mid* æbilignesse:
(*Apollonius of Tyre* p. 6 : 9-10)
(=then the king said with anger)

d. CAUSE
þa wæron *mid* gitsunge beswicene na þæt an his find ac eac swilce his frind, (*Apollonius of Tyre* p. 10 : 19-20)
(=then not only his enemy but also his friend were seduced by greed)

e. 複合的接続詞[7]
Mid þi þe he geseah þæt Apollonius swa sarlice sæt and ealle þingc beheold and nan ðingc ne æt, ða cwæð he to ðam cynge: (*Apollonius of Tyre* p. 22 : 17-19)
(=when he saw that Apollonius sat so sorrowfully and looked at all things and ate nothing, then he said to the king)

mid は本来、提携概念や随伴概念を表わしており、図5のように with がスキーマ化された時点でその意味の引継ぎが始まったと思われる。

4．結論

以上、OE で観察できる前置詞 with の意味のほとんどは図4をベースとしており、図5のようにスキーマ化をうけて mid の意味を引き継いだことを論じた。ただし INSTRUMENT 機能の萌芽は図4に関連付けて説明することが出来る。

多様な意味の発生の原因をスキーマ化で説明するのは、かなり有効な方法である。しかしそれは言い換えれば、スキーマ化はあらゆる意味拡張の事例に無制限に適用される危険性を含んでいると言うことでもある。意味の歴史的拡張を考える際には、どの時点ではどの程度までスキーマ化が進んでいたのかを見極めることが大切であると思われる。

注

1．前置詞の発達は副詞や動詞接頭辞との関係からも論ずる必要があるが、本稿では紙面の都合上扱わない。
2．tr や lm などの認知言語学で使用されている用語については Langacker（1993）参照。
3．*OED*（s. v. *with* prep. A. I. 1. a.）に初例として記載されている。ただしこの *with* は 'beside' の意味としても解釈できるかもしれない。対立概念から近接概念が発達していく過程を示唆する例と言える。
4．本稿で引用した *Beowulf* からの例は全て *OED* に初例としてあげられている。
5．*OED*（s. v. *with* prep. A. I. 1. b.）に初例として記載されている。
6．Search domain については Langacker（1993：334-341）を参照のこと。
7．ただし OE には with を使った複合的接続詞用法も存在していた。

(17)　nolde he syllan ealle his æhta þeah þe he welig wære. *wiþ* þan þe he libban moste gif man him þæs geðafian wolde.
（Ælfric *Lives of Saints* xii. 117-119）
(would he not give all his goods, though he were wealthy, provided that he might live, if they would permit him this ?)

REFERENCES

I. Texts Used:

Bately, Janet (ed.) (1980) *The Old English Orosius,* (EETS S. S. 6), Oxford University Press, London.

Bright, James Wilson (ed.) (1905) *The Gospel of Saint Luke in West-Saxon,* repr. 1972, AMS Press, New York.

Goolden, Peter (ed.) (1958) *The Old English Apollonius of Tyre,* Oxford University Press, London.

Klaeber, Fr. (ed.) (1950) *Beowulf and the Fight at Finnsburg,* 3rd edition, D. C. Heath and Company, Boston.

Skeat, Walter W. (ed.) (1966) *Ælfric's Lives of Saints,* Vol. I, (EETS O. S. 76), Oxford University Press, London.

II. Works Consulted:

Dirven, René (1993) "Dividing up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions," in Cornelia Zelinsky-Wibbelt (ed.) *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing,* Mouton de Gruyter, Berlin and New York, pp. 73-97.

Görlach, Manfred (1982) *Einführung in die englische Sprachgeschichte,* 2nd edition, Quelle und Meyer, Heidelberg.

Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friderike Hünnemeyer (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework,* University of Chicago Press, Chicago.

Langacker, Ronald W. (1993) "Grammatical traces of some "invisible" semantic constructs," *Language Sciences* 15, pp. 323-355.

Norvig, Peter, and George Lakoff (1987) "Taking: a study in lexical network theory," *BLS* 13, pp. 195-206.

Rynell, Alarik (1948) *The Rivalry of Scandinavian and Native Synonyms in Middle English Especially* Taken *and* Niman, C.W.K. Gleerup, Lund.

Simpson, John A. and Edmund S. C. Weiner (prepared.) (1989) *The Oxford English Dictionary,* Clarendon Press, Oxford. [*OED*]

Ziegeler, Debra (1997) "Retention in ontogeneric and diachronic grammaticalization," *Cognitive Linguistics* 8-3, pp. 207-241.